

「靖国を理解していない」 「反日と思わぬ」 右翼系団体が試写会



「靖国」の上映会終了後、感想などを話す参加者＝18日、東京・新宿、小林裕幸撮影

150人が鑑賞、賛否の声

上映中止で話題の映画「靖国」をめぐり、主に右翼系団体の会員向けの試写会が18日、東京都新宿区のラィフハウス「ロフトプラスワン」で開かれた。試写後、参加者らは「駄作」「労作」「靖国を理解していない」「反日とは思えない」など賛否の意見を交わした。

主催側のロフトによると、

全国から活動家ら約150人が集まった。試写する機会を設けたいという右翼・民族派団体幹部らの要望や相談を受ける形で企画したという。呼びかけ人の一人、木村三浩・一水会代表は「右翼が上映を中止させたかのような間違っただ言われ方をされていたから」と説明した。

2時間の試写の間、会場は

静寂そのもの。国会議員らが問題視した南京事件の写真を使ったシーンでも、何の声もあがらなかった。

試写後は、会場で活発な意見が交わされた。文化庁の公的助成に納得できず「返還を求め訴訟を起こす」という声が出ると、「我々も助成を受けて親靖国映画を作って反論すればいい」「別になんということもない作品なのに、メディアが注目をあおった」との意見もあった。

同社社の河原博史会長は

「個人としては、日本民族に根ざした信仰心を侮辱するものを感じた」としながら、「意義ある会だった。右翼が反社会的というイメージは違う。だけれど(映画を)見もせず抗議するわけでもない。大事なのは表現者同士のガチンコ(勝負)。そういう意味では映画館が屈してしまったのは問題だ」と話した。一水会の鈴木邦男顧問は「試写会を開き、建設的な議論ができたのはいいことだ」と話した。

見終えた活動家らの感想

【内容への賛否】

- ・通底するのは反靖国、反日の歴史観だ。
- ・東京大空襲を経験し、目頭が熱くなるほど心を打たれた。あまり反日的と思わない。
- ・神道や靖国について事実誤認がある。
- ・反対派より民族派の方がしっかりした信念を持って参拝していると思ってもらえる面もある。見てもらうことが大事。

【上映の是非】

- ・多くの人に見てもらい、文化庁が「反日映画」に助成していることを問題にすべきだ。
- ・右翼が街宣活動で上映中止に追い込んだのではなく、映画館が自粛した。対立構図をあおると我々の活動が警察に規制されるので、よく考えて対応すべきだ。
- ・上映してもいいが内容がアンフェア。糾弾すべきだ。

【今後の対応】

- ・私も映画に映っているが承諾(の申し入れ)がない。シーンをカットしてもらおうか、上映させない方法を検討したい。
- ・徹底的に無視を決め込み、日本で興行的に成功しないことを示したい。
- ・文化庁から助成をもらい、自分たちで「親靖国」の映画を制作したらどうか。